
お願ねがい Oh, My God !

みゆ貴茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お願い Oh , My God !

【ZPDF】

N6091E

【作者名】

みゆ貴茂

【あらすじ】

オトボケ少女の純真な願いが……。

都内・某所、駅前。

「うつうう……」

一人の老人が蹲り、うめき声を上げていた。
時刻は、午前8時 通勤ラッシュといつ時間帯のせいか、誰一人老人に声をかけるものはいない。

みんな、急いでいて気づいていないのか、気づいても見てみぬふりをしているのか、いずれにせよ世知辛い世の中である。
そんな中、一人の女子高生が老人に近寄る。

「おじいちゃん、どうしたの？ 大丈夫？」

少女は心配そうに老人の顔を覗き込み訊ねた。

「ううう……お腹が」

「お腹が痛いの？ 陣痛？ 生まれそうなの？」
「はっ？」

少女の言葉に耳を疑い固まる老人。

どうからどう見ても、おじいちゃんである老人のどじをどう勘違
いしたら、臨月の妊婦に見えるというのか？
ていうか、『おじいちゃん』って声かけてるじゃん。
「あつあの……」

「ちょっと、まつててね。おじいちゃん」

ほり、『おじいちゃん』って……。

少女はそう言い残し、ものすごい俊足で走り去つてゆく。

「…………」

「おまたせ」

そして、一分も経たないうちに戻ってきた。
何故か、猫車を押しながら。

「あの……それは？」

「そこの工事現場で借りてきたのよ、さつ乗つて」

力強く乗車（？）を勧めてくる少女に老人は戸惑いを隠せない。
えつなんでじや？」

「え、なんでじゃ？」

「なんであつて、病院に運ぶためじやない—おじいちゃん、お腹痛いんでしょ—！」

「いや、まあそつなんじやが……。」
「いつ場合、救急車とか呼ぶ
んじや？」

「病院、わりと近いもの。救急車呼ぶより、じつの方が早いわ」

る。 ここから一番近い病院は、およそ徒歩十五分くらいのところにある。

微妙に救急車呼んだ方が早いのではなかろつか？「ぐだぐだ、言つてないでさつさと乗つて！」

万葉一ノ本

少女は、その細腕のどこにそんな力があるのか、老人をひょいと抱えて、猫車に無理やり押し込んだ。

「……かうりかせいひめー。」

「突貫します！！」

少女は老人のつっこみを無視して爆走し始める。

卷之三

おれのNG（猫車）が行けないと教えてくれてる……」

たるのこ・たる

セーリングでいる内に 病院に到着

が

老人は青い顔をして、

「死ぬかと思った」

「アーティスト」の定義

おしゃれな人 産婦ノ科に急いで

「ふおつふおつふおつふおつ」

突如、老人はすっと毅然とした態度で立ち上がる。

「どうしたの、おじいちゃん？ いきなりバルーン星人の真似なんかして」

「いや、普通に笑つただけなんじゃが……。

ともかく、すまんかったのう、お嬢ちゃん。実は腹は痛くないんじゃ」

「えつ？ どうこう」と

「実はわし、神様でな。人間を試すためにわざと腹痛のふりをして蹲つとつたのじゃ」

老人は森厳な表情で言い放つた。

少女は愕然とし、

「たつ大変！ おじいちゃん、お腹じゃなくて、頭がこんがらがつたキューーちゃんだったのね！」

などとのたまう。

「頭がこんがらがつたキューーちゃんつて、いつたい……。ともかくじや、信じられん気持ちも分かるが、わしはほんとに神様なんじゃよ。お嬢ちゃんは多少……いや、かなりスチヤラカピーブーじゃが、根は純真で優しい人間じやーよつて、どんな願いでも3つだけ叶えてつかわすぞよ」

「『ゾゾ』って確かに、今どきそんな言葉遣いするのは神様だけだわ！」

「そうか？」

ガビーンと後退りしながら、神様の存在を肯定する少女。

「しかし、あれね。3つの願いって、神様もべたべたなことするんですね」

「ほつとけーさあ、早く願い事を言つのじや」

「そうねえ。私、叶えてほしいことって特にない

あつそつだ

！」

少女は自分の足元を見て言い放つ。

「ソックタツチ貸してくださいらない？」

「は？」

「さつきから、靴下がよれてどいつも気になつてたのよ」

「そんなもん、そこいらで買つてくつや……」

「今すぐ欲しいのよ！ 気持ち悪くつて、これ以上歩けないわ！」

散々、爆走しておいて何を今更。

「まつまあ、お壊ちゃんがそこまで言つなり……」

神様は額に汗をかきながらも「承し、両手を翳す。

「ちちんぷいふい」

「まあ、古臭い呪文だこと」

「じやかしい！…ちちんぷいふい、汝の願い叶えてつかわす」

神様が呪文を唱え終わると、何もない空間から一瞬でソックタッチが姿を現す。

「わあ、すごいわあ……やつぱり神様ともなるとすげに手品ができるもんなのね」

「手品じやないつて……」

「神様、もう一度今の手品見せてくださいな」

「聞いてないし……つて、2つ目の願いもソックタッチかよ！？」

「ええ、買い置きが欲しいし。それにこんな不思議な体験をしたのつて、びっくりハウスに入つたとき以来ですもの」

「びっくりハウスと比肩されても……。本当によこのじやな？」

「ええ、お願ひ！」

「ちちんぷいふい、汝の願い叶えてつかわす」

今度は、何もない空間からどつやつとのようにソックタッチと風呂敷が現れた。

「わあ、こんなにたくさん……ほとんどにありがとーこれで、暫く買わずにすむわ」

少女は心底、嬉しそうに目を輝かせる。

どんだけ、ソックタッチを所望していたのか？

「まあこれだけあれば、一生買わずにすむのではないのか」

「どうかしら？私の靴下すぐよれちゃうから」

「あつそ……。ああ、風呂敷はサービスじや。これに包んでいくがいいじゃろ」

「つぶ。神様つて氣前がいいのねえ。ポンガくらー」

さすがに風呂敷より、バラバラになつた肉体と服を再生させたポルガの方がサービス精神旺盛だらう。

「さてと、ほんとにはりがと神様。私、学校あるからいくわね」

少女は大量のソックタツチを包んだ風呂敷を抱え立ち去るつとする。

「これこれ、もう一つ願いは残つてあるぞ」

「ええ？でも、もう願い事なんてないわよ」

「なんか、あるじやろ？大金持ちになりたいとか」

「私、そんなにお金に困つてないから。まあソックタツチ買うお金も持つてなかつたけど」

それは一文無しに近いのでは？

「では、絶世の美女になりたいとかはどうじや？」

「ううん、今の顔わりと氣に入つてるし」

確かに少女の顔は、絶世の美女には程遠いものの、そこそこ愛らしいものではある。

「じゃあ、天才になりたいとかは？」

「ほら、私みんなから『バカなやつほど可憐』ってよく言われてるし」

「今までトンチンカンだといつそ清々しくて可憐く思つかもしない。」

「でも、なんかあるじやろ？」

「そうねえ。じゃあ、『世界が平和になりますように』……これにしてくださいる？」

「…………」

その願いを聞いたとたん、神様の顔が曇る。

「本当にそんな願いでいいじゃな、お嬢ちゃん！」

神様はそれまでとは違つた、どすの利かせた声で訊ねた。

しかし、急いでいた少女は特に気にとめる様子もなく、「ええ、それでいいわ。あつもうホームルーム始まってる。ほんと、神様ありがとう。それじゃあね」

そう言つて走つて学校へ向かつていつた。

「ふう。しかたなかろうて」

神様は深いため息を吐いて、両手を翳す。

「ちちんぷいぷい、汝の願い叶えてつかわす」

「遅れて、すいません！」

少女は慌てて教室に駆け込んだ。

「あれ？」

誰もいない。

今はホームルームの時間帯のはずであるが……。

少女は廊下に出て、辺りを見回す。

そういえば、隣のクラスも、その隣のクラスも誰一人として気配が感じられない。

「今日、休みだっけ？」

『世界が平和になりますように』

少女が何気なく発した無垢な願いのために。

世界平和の実現のために、ほとんどの人類が邪魔な存在であつたのだ。

そう、少女のように純真な心をもつたもの以外は。

「あつまた靴下よれてる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6091e/>

お願い Oh, My God !

2010年10月8日15時54分発行